

ワークショップ：

「日本語教育スタンダードと教材開発 ～<わくわくする授業>をめざして
～」

嶋田和子先生（アクラス日本語教育研究所）



前半

<配布資料の補足>

皆様こんにちは。お久しぶりです。初めての方もいらっしゃると思いますが、一年ぶりに参りました。去年ここに伺った時は、またここにお伺いするとは思ってもいなかったもので、本当にうれしく思います。今回お呼びいただいた時に、こんなお話をいただきました。「私たちはあれからスタンダード教育を一生懸命やっています。どんどん変わってきているので、その成長を見てください。」と。私はすごく素晴らしいことだと思い、来週またすぐスイスへ行くと2年前から決まっていたのですが、何が何でもお伺いしたいと思って参りました。宜しくお願いします。

本日のワークショップ

プログラムのタイトルは、「学習者のやる気を引き出す授業展開～スタンダードで<わくわく授業>を！～」です。皆さんは授業をやる時わくわくしていますか？「これを教えなければ」と思っていませんか？そこが一つの大きなポイントです。

先ほどドルゴル先生が「連携が大事だ」とおっしゃいました。スタンダードがよくわからないという方もいらっしゃると思いますので、本日のワークショップでは“「スタンダード教育」って何？”ということをももちろん伝えます。でも、まず皆さんにご自分で見て考えていただくと思い、その説明はプログラムの最後にしました。それまで、スタンダードとは何だろうとご自分の頭で考えてみてください。

- I. 「教材開発」を考える前に、本当に初心に帰って既存の教材をまずクリティカルに見てみましょう。そこからいろいろなものが見えてきます。
- II. 次は、自分自身の「教育実践」を振り返ってください。「クリティカルに見る」とは、ただ批判するのではなく、どこがよくてどこが問題なのか、では自分ならどう

するか、と考えることです。その後、自分自身もクリティカルに見てください。スタンダードや Can-do を考えていると細かいところにばかり目がいてしまいがちですが、これがすべてではなく、いろいろな道があります。

III. それから実践で、学習者も教師もくわくわくする授業>とは何?ということを考えましょう。スタンダード教育を導入している目的の一つはこのためです。

IV. そして、<楽しく学べる>教材を作るヒントを、いろいろなことの中からお伝えしていきたいと思います。この「教材」とは、毎日のプリントを指しています。今日は漢字を取り上げました。前は漢字の初級の最初の部分を少しお伝えしたので、今日は少し進んだ初中級を、皆さんの中で実際に考えていただきます。

V. そして最後に、「スタンダード教育」って何?というところに戻っていききたいと思います。

VI. まとめ

以上が本日のワークショップのメニューです。

I. クリティカルに見る！ どこが「問題」でしょうか？どうすればいいでしょうか？

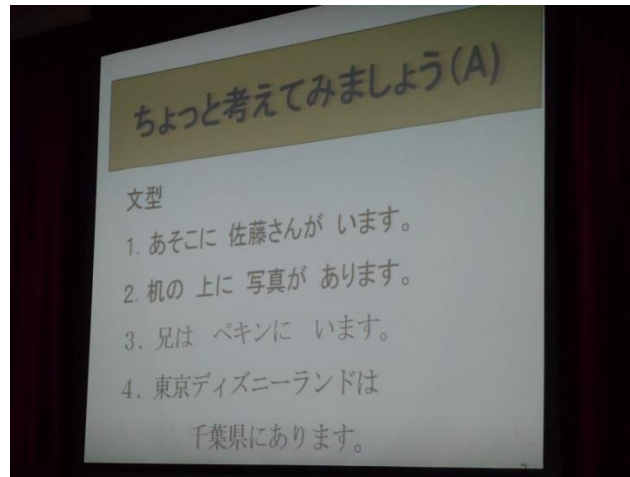
II. 実践を振り返りながら…

スタンダード教育とは、一方的に教師が教え込むというものではありません。そこをよく知っていただきたいと思います。

「スタンダード教育で教材を開発した」と言っても実はあまり変わっていない、ということはよくあります。つまり教師が変わっていないし、スタンダード教育とは Can-do で記述して教材を作ることだけではないのです。それはスタンダード教育の一つにすぎません。

もちろん、『みんなの日本語』も文型がしっかり入っていていい教科書です。ただ、あれをしっかりとこなすには本当に大変です。場面を、ストーリーを、流れを作る必要があるからです。私も 10 年前までは使っていましたが、授業の準備がとても大変でした。では、もし自分たちがそれを使うならどのように工夫すればいいかを考えてみてください。これに Can-do をつけても意味はありません。教材を批判するのではなく、これを題材に、自分たちはどのようなところに気をつけたらいいかということを考えていただきたいです。

1. 既存の教材を見る①



これは『みんなの日本語』第10課の文型です。『できる日本語』も、能力試験対策として言語的知識・文型も全部入っていますが、文型も実際に使う場面に近い形で使うようしており、これもスタンダード教育の一つの方針です。

では、この例文1,2について、お近くの2~3人で、2,3分で話し合いをしてください。

- ①実際にどんな時にこの文を使うのか。
- ②実際に教えている人は、これを導入する際どんな工夫をしているか。

<参加者同士で話し合い>

まだ2分たっていませんが、そろそろ話し合いを終わってください。授業の中では柔軟にやっていくことが大切です。話し合いに5分も与えたら飽きてしまい、あまり短すぎたら話し合いができません。そのあたりを見ながら柔軟にやっていくことの大切さもお伝えしたいです。

では、どなたか意見を言ってください。

(参加者 A)

①無人島に行ったらだれもいないと思った時、「あ、あそこに人がいます。」

(嶋田先生)

とてもいい考えですが、その時は発見の「あ、」という言葉があります。これが大事です。そう思うと、この「あそこに佐藤さんがいます」という文はただの文型で、ここにフィラーや感動詞を入れていかなければならないことが分かります。

教科書に書いてあることは間違いではありませんが、不適切なものが多いということに気が付いてほしいです。この文も、間違いではありませんがレアケースです。無人島で使う言葉をここで覚える必要はないでしょう。

(参加者 B)

①草原を走っていて、人を見つけ、「あ、…」

(嶋田先生)

これも、「あ、」ですね。そしてモンゴルですから草原を走るという場面もよくあります。そのような場面を教材作りの際にも抽出していけばいいのです。でも、これも「あ、」が抜けています。

皆さんがよく使っている教科書は、終助詞「ね」「よ」、フィラー「あのう」「えー」等が抜けています。これを知ってください。

(参加者 C)

コンサート会場で友達と 3 人で会う約束して、一人とは会いましたが、あと一人佐藤さんがいません。「佐藤さんはどこにいますか。」「あそこにいますよ。」

(嶋田先生)

それは、「佐藤さんは あそこにいますよ」でしょう。例文 1 ではなく、例文 3 の形です。

(参加者 D)

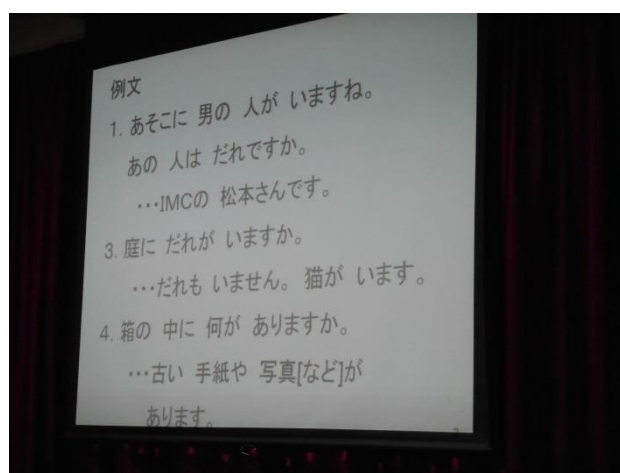
二つの文章は、目で見えてそれを発見したという感じ。

(嶋田先生)

そうです、発見です。

皆さん、これから作るとき・考えるときは、場面や状況を考え、なるべく学習者に必然性があることを心がけてください。どうしてかと言えば、スタンダード教育とはやはり言語活動がまず先にあるからです。場面・状況があり、どんな文脈かというところから始まって、そこで何をすることができるか (Can-do) につながっていくのです。

では、次は会話文です。

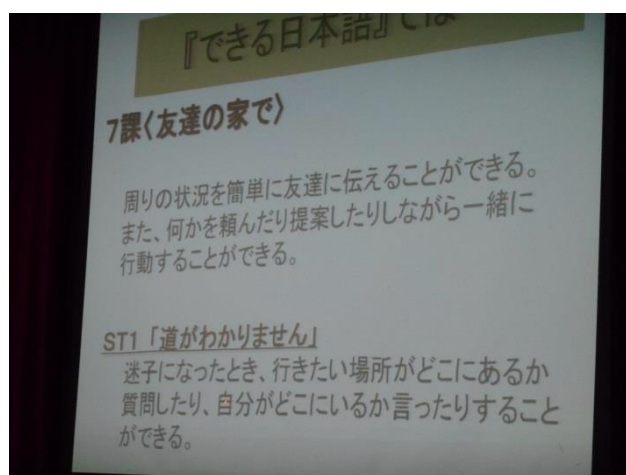


例文 1 は、このような会話をしなくても見ればわかることですから、あまり意味がないでしょう。

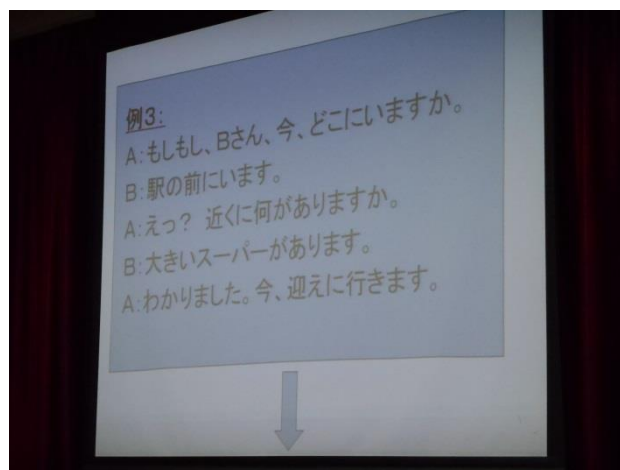
例文 3 はもっと不自然です。このようなことは言わないのではないのでしょうか。

このような不自然な会話がどうしてあるかと言うと、文型が主役だからです。だからよく気をつけてください。これからやっていく時には、学習者が主役です。主役を文型・文法にしないでください。また、学習を「何から始めるのか」ということも気をつけてください。まず入るべきは文型ではなく、言語活動です。それが一番大切で私が言いたかったことの一つです。

これが『できる日本語』ではどうしているかと言うと、**Can-do** があります。



まず「周りの状況を〜〜〜」というこの課の大きな目的があります。その下にスモールトピックが三つあり、それぞれが学習目標です。みんな **Can-do** で書いています。そしてどのように授業が進むかと言えば、まず場面があります。「友達の家へ行く途中で道に迷いました。」そこで会話があります。

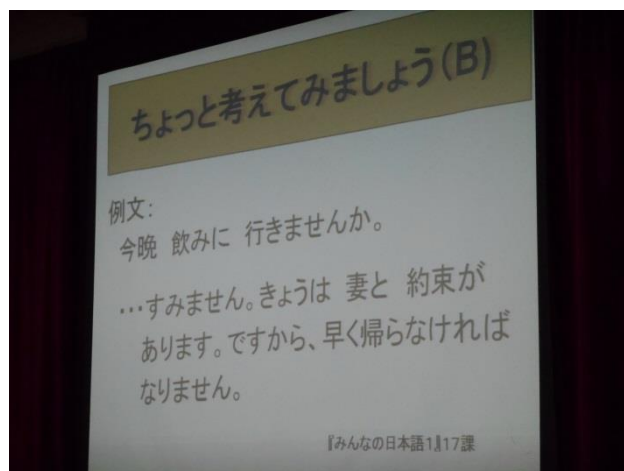


先ほど「どんな場面で使う？」と考えた文型をこのような場面での会話に取り入れました。これがすべてではないので、もっといい場面があったら皆さんが作ってください。私たちはこの場面を使ったということです。

これらの例から、少しずつ場面の大切さが分かっていただけたかと思います。

2. 既存の教材を見る②

では、次はこの会話について考えてみましょう。これはたくさん問題があります。どんな問題があるか、となりの人と1分で探してください。



<参加者同士で話し合い>

では、どなたか意見を言ってください。

(参加者 A)

会話らしくない。あまりにも長い。

(嶋田先生)

断るのにこの長さはないだろう、ということですね。そうだと思います。

(参加者 B)

日本の男性は、妻と約束があるとは言わないと思う。

(嶋田先生)

そうですか。では、モンゴルの男性はこのように言って断りますか。(モンゴル人男性参加者…いいえ。)日本の男性に限らないようですね。誘われたときに、「今日は妻と約束があります」と言い切るかと言うと、まずないでしょう。

(参加者 C)

飲みに行くぐらい親しい間柄なのに、「ですから、」「～～なりません」と語調が強い。

(嶋田先生)

まだ第17課なので仕方ない面はありますが、それでも語調が強すぎる、ということですね。「～なければなりません」はないでしょう。これも、この教科書は文型が主役だからです。第17課は「ない形」から入り「～なければなりません」を教えなければならぬので、無理にこのような不自然な会話文を入れました。

では教えなくてもいいかと言うと、言語的知識を保証しなければならない面はあるため、『できる日本語』でも「～なければなりません」をもちろん学習します。でも、こ

のような場面ではありません。皆さんも教材を作る際にはそこを考えてください。どうしても教えなければならない文型があるなら、なるべく必然性のある場面を作ってください。

もう一つ、見落としがちなのが「ですから」です。「ですから」は、本来もっと論理的な場面で使う言葉です。ここで「ですから」を教えるはいけません。この点はなかなか気づかないことが多く、ワークショップ等で「これを今までどのように教えていたか」と聞くと、「このまま教えていた。今気が付いた。」と言う人も多くいます。大切なことは、気づいたことを素直に振り返り、他の人と話し合い（対話）をすることです。

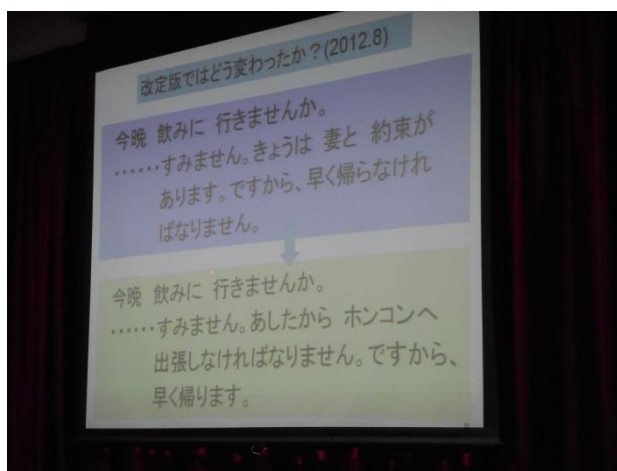
ここで覚えておいていただきたいことは、“理解文型”と“使用文型”についてです。

- 〔 理解文型：聞いてわかればよい文型
- 〔 使用文型：使えないと困る文型

例) 初級の前半では、

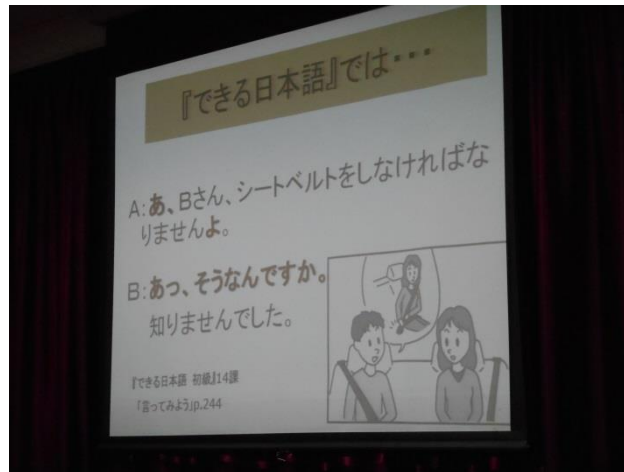
- ・「～なければなりません」→必要ないが、知識としてとりあえず出す。
- ・「～ないでください」→理解文型

『みんなの日本語』は一昨年改訂版が出ました。



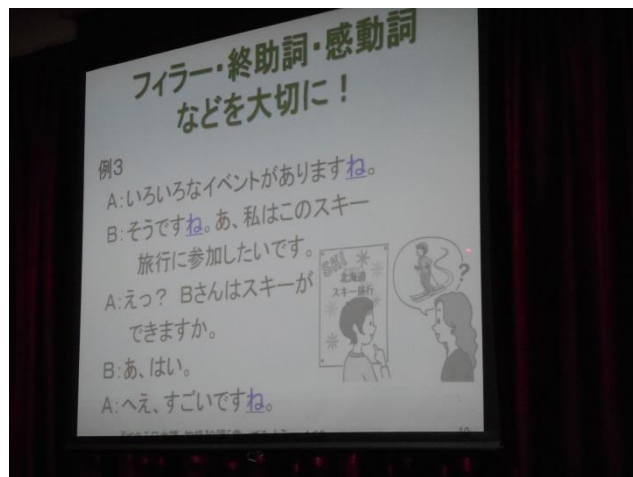
その改訂版ではこのように変わりました。「妻と約束があります」→「ホンコンへ出張しなければなりません」となり、少しよくなっていますが、「ですから、」が残っています。やはりここでは「ですから、」は使わないでしょう。この教科書は文法が主役なので、改定されてもそこがあまり重視されていないようです。

では、『できる日本語』ではどうしたかと言うと、このような場面にしました。



「～なければならない」を教えなければならないなら、必然性のある場面を作り、発見の「あ、」、終助詞の「よ」も加え、生き生きした会話にしてください。

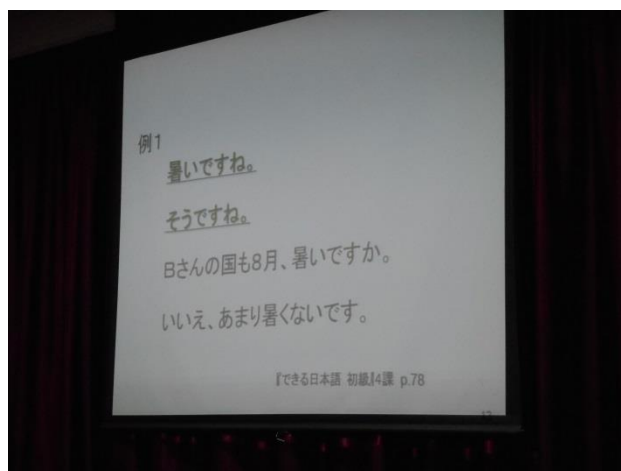
フィラー・終助詞・感動詞はとても大切です。これは言葉で教えるのではなく、場面と状況の中でしっかり学ぶものです。私たちは初級では意味は説明しませんが、学習者は習得していています。



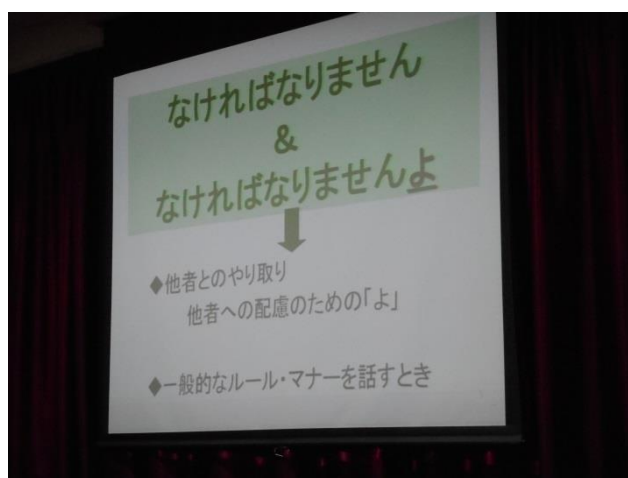
他の教科書では、“会話練習”の際にだけこれらを入れることが多いですが、『できる日本語』では“口の練習”でも、入れて練習します。常に練習するので身につくのです。

もう一つお伝えします。これまでの教科書は文型中心なので、たとえば「～ができます」について教える際も、“能力”と“状況”の二つの意味があるのにもかかわらず、同じ課で教えます。でもスタンダード教育では Can-do でみるため、たとえ形が同じであってもその二つを一緒に教えるのはおかしいと考えます。そこで、『できる日本語』では 9 課で趣味や能力について、10 課で状況についての「～ができます」を学習します。

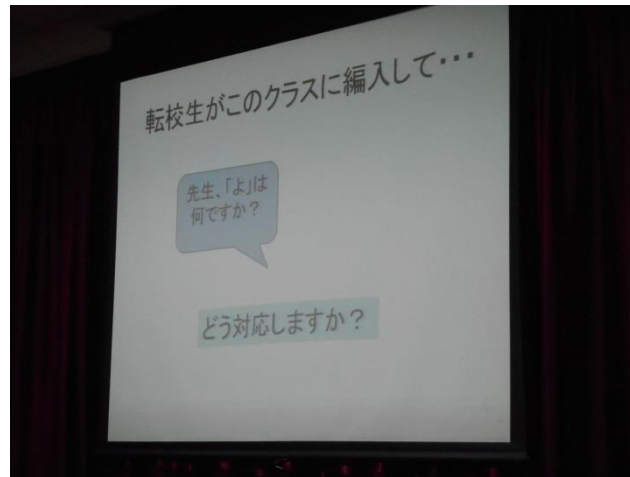
また、形容詞や「とても」「あまり」を教える際、どうしますか。その時も、“それを教える”という意識ではなく、“自分の国のことを言えるようになりたい”という気持ち大切です。



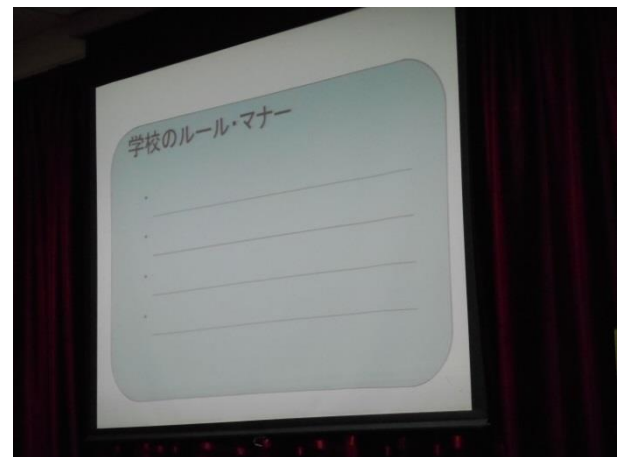
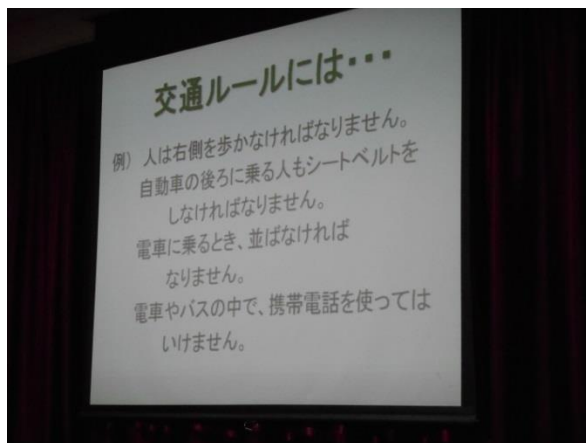
まず、「暑いですね」「そうですね」と共感の「ね」を使って話してから「Bさんの国も8月、暑いですか」「いいえ、あまり暑くないです」に続くことで、会話が生き生きとします。



「なければなりません」「なければなりませんよ」この両者の違いについても、文法の説明をするのではなく、場面の文脈の中で学びます。

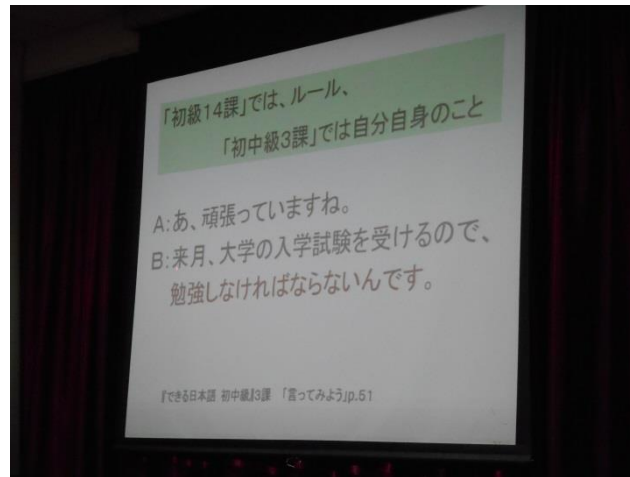


ある日転校生が、教師にこの「よ」について質問しました。すると、他の学習者がこれに答えました。「『よ』は教えます。やさしい気持ちになります。」「友達知りません。私は知っています。教えます。」 このように学習者が自然に身につけていっています。



もちろん、話し言葉と書き言葉は違います。ですから、このように書く練習もあります。このようにすることで、一般的なルールについて話すとき、書くとき、話すとき、それぞれの場面についてすべてできるようになります。これがスタンダードに沿ったやり方です。

これが、“「ない形」を勉強したから「～なければなりません」もできるでしょう”と考える従来のやり方と大きく違うところです。



なお、「～なければなりません」には意味が二つあります。この二つは教科書によっては一緒に教えられていますが、それはやはり文型中心だからです。『できる日本語』ではこの二つを分け、スパイラルで教えます。一回やって終わりではなく、何度も繰り返し違う場面で出すのです。

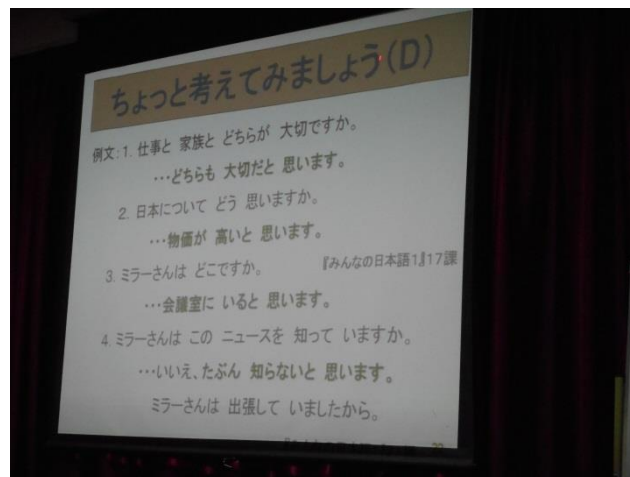
意味 1 ; 一般的なルール → 初級で教える

意味 2 ; 個人的にやらないといけないこと → 初中級で教える

こうしていくことで、今までと大きく違ってくることでしょう。

3. 既存の教材を見る③

これは『みんなの日本語』第 21 課です。「～と思います」について学習する課ですが、これも形式主義で、“意見”と“推量”二つの意味が同時に出ています。だから文法説明がたくさん必要になります。



それを『できる日本語』では、はっきり分けています。

14 課	国の習慣 異なる文化の中 で暮らすため に、習慣・文 化・ルールを 知り、自分の 意見を簡単に 言うことがで きる	1	初めて見た！ 初めて聞いた！
		2	ルール・マナー
		3	私の意見

1	初めて見た！ 初めて聞いた！	使い方が分からな い人に簡単に使い 方を説明すること ができる	Vると、～ ～と言います
2	ルール・マナー	トラブルを未然に 防ぐために、ルール やマナーなどを英 語に言うことがで きる	Vてはいけません Vなければなりません Vなくていいです
3	私の意見	身近なことについ て、自分の意見を簡 単に言ったり相手 の意見を聞いたり することができる	～と思います（意見）

14課「できる！」

●自分の国の習慣やマナー・ルールを紹介し
て、日本のことも聞きましょう。

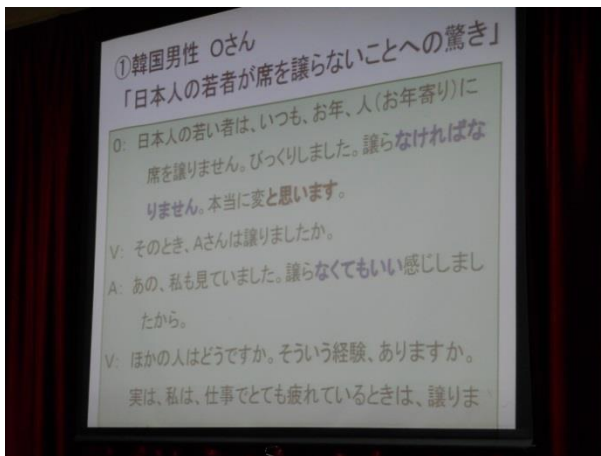
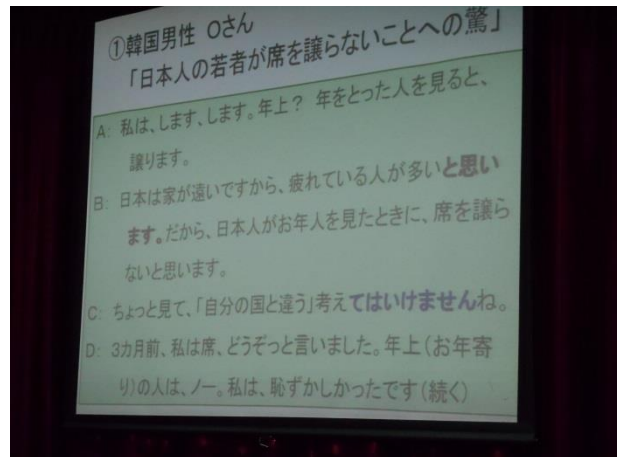
1. テーマを聞きましょう。
例：校則、食事のマナー、携帯電話など
2. ポスターを作りましょう。
3. クラスメイトや周りの日本人に発表をしま
しょう。
4. 発表を聞いて、お互いに意見や感想を言い
ましょう。

文型も取り上げますが、まずトピックと **Can-do** があります。今まではまず文型があ
り、**Can-do** はありませんでした。そうではなく、自分が伝えたいことを言えるよう
になるための学びを考えてください。モンゴルでは、なかなか日本人と会って話す機会が
ないかもしれませんが、他のクラスの先生を呼んでくるなど、工夫して日本人と触れ合
う機会を作ってください。

もう一つ大切なのは「対話」です。今の日本語教育にはこれが欠けています。

「対話」「共創型対話」：価値観の違う二人が話して、他者理解・自己理解を深めて、
あらたな価値観を作ること。

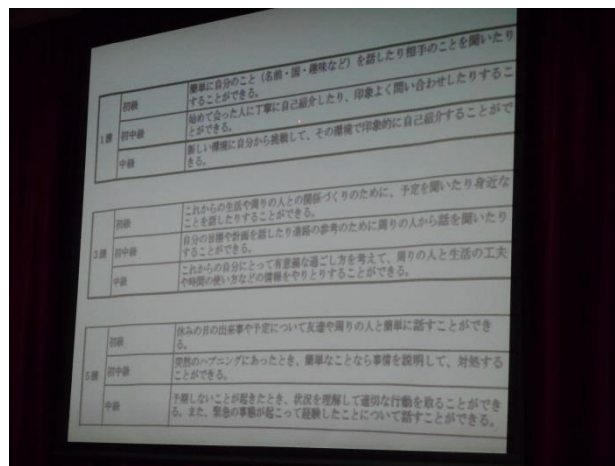
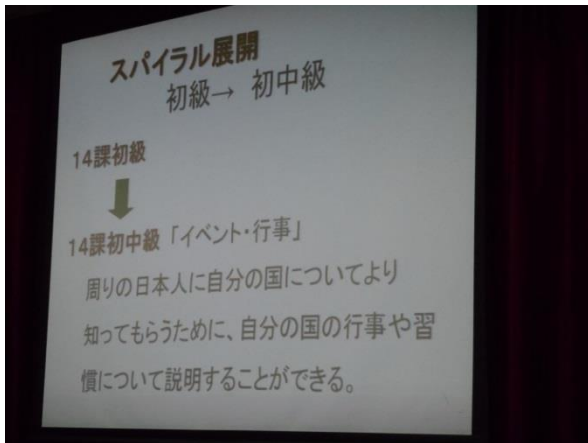
ですから、教科書を新しくし場面・状況、**Can-do** があったらいいというわけではあり
ません。やり方は様々で、教案も一つだけをそのままというわけにはいかず、出てきた
“新たな”ことを拾うことが大切です。



学習者・日本人の間でこのような話がされました。これが対話です。学習者はまだ初級前半レベルですが、今までここで出してきた「～なければなりません」「～と思っます」の文型も使っています。できるだけ話すようにしていくと、言葉も出てくるようになるのです。

4. スパイラル展開

『できる日本語』では、たとえば初級 14 課でしたことと同じようなトピックを初中級 14 課でもまたやります。そうすることで、“自分はできるようになった”という達成感が得られます。各課のトピックは同じですが、初級→初中級→中級と進むと、文型も Can-do も広がっていき、同じトピックでもどんどん広がって話すようになります。



5. 学習者の様子

①ビデオ視聴：二人の学生の自己紹介の様子から、成長を追う。

ビデオ1：学生A 来日すぐ →ビデオ2：学生A 3か月目

ビデオ3：学生B 来日すぐ →ビデオ4：学生B 3か月目

初級・初中級・中級の連携が大切で、連携ができればこのような成長が見られる。

②ビデオ視聴：自国の伝統・文化についての学生の発表の様子

ビデオ5：学生C 5か月目

発表の目的(1) ただ文型を学ぶだけでなく、学んだことを使う場を作ること。

発表の目的(2) 人とつながる、対話すること。だから発表の後、質疑応答も自分たちです。

※「リフレージング（言い換え能力）」…これはとても大切。分からない言葉があったら、学習者が自分たちで言い換えてみる。みんなの持っている知識が違うため。

③学習者の作文紹介

初級作文 → 初中級テスト → 中級作文 の三段階の作文から、成長が分かる。

文型中心ではなく、いつも書く目的がある。“書いて伝えたい”という思いがあり、楽しみわくわくしながら書くから習得が進む。

④学習者が教師にあてたメール紹介

“先生、おはようございます。今電車が遅れてしまって授業に間に合いそうにないんですが、どうしたらいいのでしょうか。”

中級 5 課まで学習した学習者。

(1)Can-do、スタンダードで必然性のある場面でやっていくと学習者に定着し、緊急事態がおきても、習ったことをそのまま使えるようになる。

(2)中級で大切なのは、単発の文型ではなく習った文型を複合的につなげて、使えるようになること。「～てしまう」「～そうにない」「～んです」「～どうしたらいいか」これらを別々に練習しがちだが、それらをつないでいくことが日本語らしさであり、中級・上級に行くポイント。

6. 「わかる」から「できる」へ（『月刊日本語』掲載記事）

後半

Ⅲ. 授業で学習者も教師もワクワクしていますか？

Ⅳ. 楽しく学べる教材を作るヒントとは？

◆『できる日本語』第 3 課を紹介

①「話してみよう」4 枚の扉絵：

第 2 課までにやったことを使い自由に話してみる。+当該課で学習することをイメージ化する。→言えることを言う、言いたいと思うことが大切。

②「聞いてみよう」まず CD を聞く：

今までの教科書とは違う新しいやり方。全部わからなくてもよく、聞いたことがある単語が分かること。勉強の最後にもう一度聞くことで、「今なら全部わかる！」と達成感につながる。

③Can-do 提示、絵を見てまず言ってみる、それから CD を聞き何と云うのかを発見する。

④「言ってみよう」口の練習：

口の練習であっても、その文をどんな時に言うのかを考え、イラストをつけたりしながらできるだけ必然性のある場面を作ること。ただ「毎朝、何時に起きますか」と言うのでは文型のための練習になる。それよりも、たとえば寝ぐせをつけたままクラスメイトが学校に来たという状況があったほうが、「毎朝、何時に起きますか」という質問に意味がある。

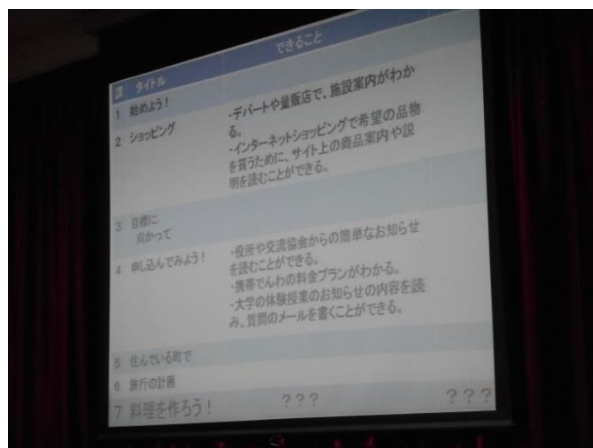
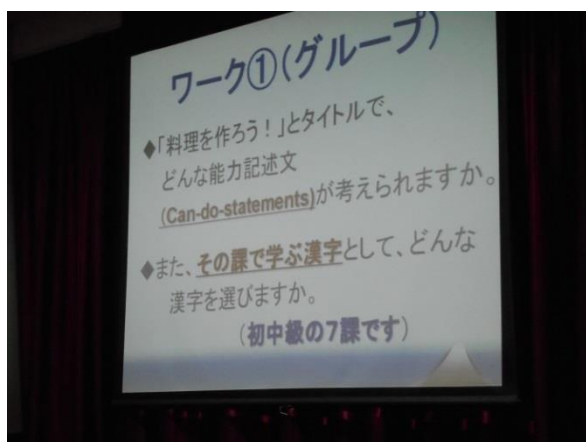
⇒楽しい教材を作るには、いろいろなところに工夫する余地がある。

◆ここまでの質疑応答……なし

◆楽しい漢字学習を考える 『漢字たまご 初中級』を使って

漢字も Can-do です。この漢字がこの場面で求められている、という考え方でやると、学習者が楽しそうに学習します。

1. ワーク（グループ）



※初中級 7 課：『みんなの日本語Ⅱ』後半程度

(1)：「料理を作ろう！」というタイトルで、どんな Can-do が考えられますか。

(2)：その課で学ぶ漢字として、どんな漢字を選びますか。

<グループで 1, 2 を考える→10 グループが代表して、選んだ漢字を WB に書く>



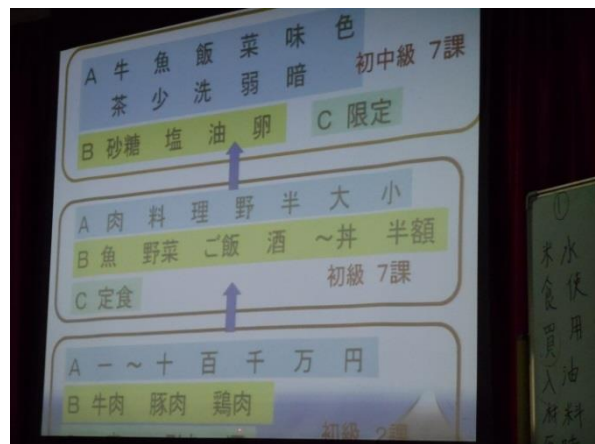
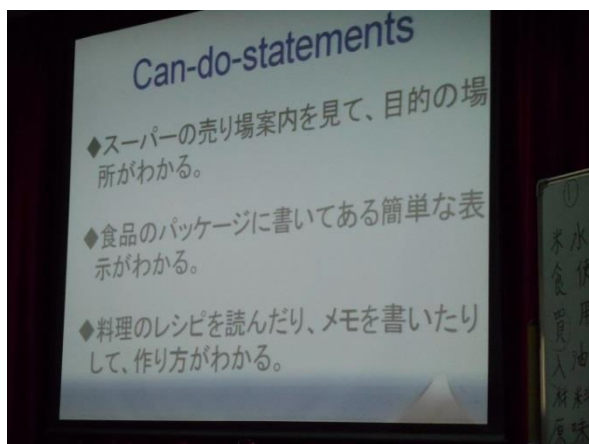
今までにどんな漢字を習っているかわからないので、選ぶ漢字がグループによって違うのは当然です。このワークの目的は、①漢字教材を作る際の考え方を学ぶ、②異なる人・グループ同士で話し合う・対話することでいろいろな意見が出てくることを知る、という2点です。

<各グループに、Can-do となぜその漢字を選んだのか聞く>

- ・グループ全員が参加するため、WB に書いた人とは別の人が説明する。
- ・「料理を作ろう」というテーマから少しはずれた漢字（買、楽など）や、難しすぎる漢字（鍋、玉、生地、注、焼、混、蒸、鶏など）については、「ここでは“漢字”を勉強するのではなく、“言葉”で教えればいいのでは？」と嶋田先生がコメント。
- ・漢字の数が多すぎるチームには、「ちょっと教える数が多い。適切な数が必要では？」と嶋田先生がコメント。

2. 『漢字たまご』の考え方

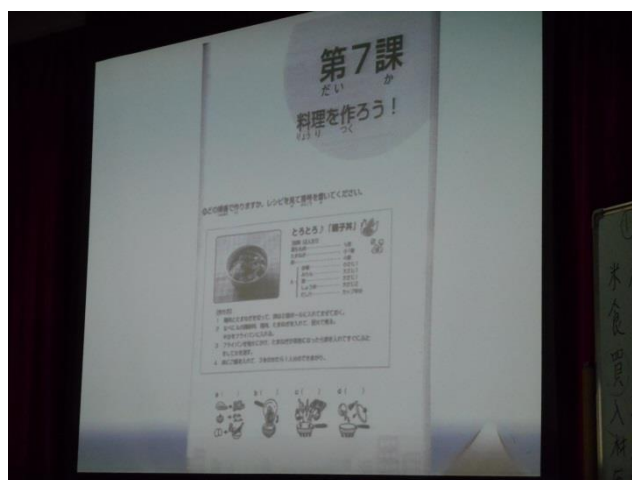
では、『漢字たまご』ではどうしたか。もちろん、これが唯一正しい答えというわけではありません。



漢字のレベルには A,B,C の三種類あります。

- A : 読めて書けるべき漢字
- B : 書けなくても読めればよい漢字
- C : 読めなくても意味が分かればよい漢字

これもスパイラルになっていて、初級の最初では C だった漢字でも、授業が進むにつれ B→A と上がっていきます。



- ①まず、扉絵：今までに習ったことを使いながら、当該課のイメージ化を行う。
- ②当課の学習漢字：A…読んで書ける漢字なので、書き順もいる。「My space」…教科書は自分で作っていくものであり、このスペースに訳や絵を描いたりして自分の覚え方で覚えていく。B…読めればよい漢字は書き順なし。
- ③「書いてみよう」：できるだけ楽しく学べるような工夫と、パーツも大切にしている。
- ④「やってみよう」：書いて覚えるだけではなく、タスクをしながらやっていく。

- ⑤「CD」：これは新しい漢字学習の方法。漢字も聞きながら考え、勉強することが大切。楽しみながら統合的に勉強することができ、日本留学試験の聴読解対策としても有効的。

このように、タスクをいろいろな形でやっていくと、きっと楽しく勉強できます。授業は一日に1, 2時間しかなくたいしたことはできません。授業のあと、自分で勉強しなくなるような授業にしていってください。

3. ビデオ視聴 『漢字たまご』初級第8課 授業風景

・まず復習：『できる日本語』より3課ほど遅れて漢字授業に入ると、語彙の復習になる。

・新出漢字A：教師が1文字ずつ書いて見せた後、「どうやって覚えますか？ Make story」と学習者にきき、覚え方を学習者が自分たちで考える。（だから漢字のパーツを覚えておくことも大切。）

例) 「家」…うちでかぞくとぶたにくをたべます(2課で「豚」が読めるようになっており、それと共通のパーツを見つけた。)

「父」…手を広げたおとこの人のポーズ。お父さんは体が大きいから。

「妹」…妹はスカートをはきます。

「姉」…お姉さんはぼうしをかぶります。マフラーをします。

※漢字の授業でも学習者が楽しそうにどンドン話す。語彙も増やせる。

→教師が教え込むのではない。初級でも学習者に話してもらうことで自分で覚えたがる。

4. 質疑応答

Q1: Make story のとき、学生から出ない場合もあるかもしれないが、教師はあらかじめストーリーを考えておくのか？

A1: 教師も考えておくが、だんだん学生が考え、出してくるようになる。

Q2: 漢字の授業はどのぐらい時間をかけるのか。

A2: 1課を勉強するのに、1日25~30分×2~3回。

V. スタンダード教育って何？その魅力は？そして、課題は？

VI. まとめ

1. スタンダード教育とは

スタンダードがよく分からない、意味があるのか、等色々な考え方があると思います。まずは、自分たちがやっている実践をよく考えなければなりません。教材が **Can-do** で書いてあるからいい、といった問題ではありません。本当のスタンダード教育とは、まず“教育理念”“教育目標”“学習目標”が大切です。そして、“何を学ぶ？”“どうやって学ぶ？”“どう評価する？”全部をあわせてスタンダードです。教材ばかりに目がいくと、教え方が古い文型積み上げのようなスタイルばかりになっていき、何も変わりません。

2. 世界の動き

では、世界ではどうなっているのでしょうか。

(参考①) アメリカでは 1996 年に ACTFL が中心になってナショナルスタンダードを発表しました。これは(まだうまく機能していないが)縦の連携も重視しており、それを明示しました。その他にも、こんな教育をしたい、という理念を語っています。たとえば、

- ・ 5C : 言語はこのように学習しなければならない、という考え方。
- ・ 文化の三角形 (3P) : 文化の見方。Product、Practice だけではなく Perspective の大切さも注目。

(参考②) 日本では、JF 日本語教育スタンダードが 2010 年に発表されました。これは、「日本語の教え方、学び方、学習成果の評価のし方を考えるためのツール」です。包括的に見てください。

(参考③) ヨーロッパには、CEFR があります。これは Learning, teaching, and assessment. (学習、教授、そして評価) となっており、全部で CEFR です。今までは teaching (教授) に光が当たっていましたが、これはまず learning (学習) があります。学習者の反応を見ながら授業を組み立てていくのが本当の授業です。また、Reference (参照枠) と位置づけされ、「この枠組みは開かれたものであり、かつ柔軟性に富み、必要な改訂をしながらそれぞれ個別の状況に応じて使用できるものでなければならない。」とあります。これはとても大切なことです。

これで、少しでもスタンダードのことがわかっていただけたのではないのでしょうか。ではここで、モンゴルではどうなのか、ドルゴル先生にお話しいただきます。

3. モンゴルの動き (モンゴル日本語教師会会長 ドルゴル先生)

最近、いろいろな外国語でスタンダードの研究が進められています。アメリカのナショナルスタンダードは 2 年前、CEFR は昨年、それぞれモンゴル語に訳され、今販売されています。スタンダードは急に出てきたものではなく、世界の外国語教育が変化・発展してきている中で、モンゴルにもその流れがあるということです。

日本語教育は、数年前から教材、教授法、評価等を少しずつ部分的に紹介するところから始めました。そして昨年からは実践教育を開始し、来年への教材開発につなげようという方針でやっています。JF 日本語教育スタンダードは、モンゴル国立大学のデルゲレフツェツェグ先生、同エンフジャルガル先生、文化教育大学のデルゲルマー先生のお力をお借りしてモンゴル語訳を作りました。まだ正式なものはありませんが、各学校に配布し使っていただき、今後できれば正式版にして皆さんに使っていただけるようにしたいと考えています。

(嶋田先生)

スタンダードをやって、モンゴルの教育は変わってきましたか。

(ドルゴル先生)

最初に取り入れたいと言っているのはドイツ語、次にフランス語です。英語はアメリカのものをもとにしてスタンダードを作ってしまう、教師教育を先に考えなかったため、研究者からは失敗が指摘されたりもし、今変えようとしてかなり苦戦しているようです。その点、日本語は順調に進んでいると言えるでしょう。まず先生方の教育から始め、振り返りをしながら実践教育をし、モンゴル・マイ・スタンダードを作ろうとみんなが変わってきています。

(嶋田先生)

そのように、スタンダード教育をすることで、みんなが何をやっているかということが見えてきます。そこから、共有・協働が始まります。この芽は本当にすばらしく大切にしてほしいと思います。私は世界いろいろな国へ行っていますが、モンゴルは本当に熱く、また、日本語能力もすばらしいです。みんなで力を合わせて対話を重ね、作り上げてほしいと思います。

4. 質疑応答

Q1: UB 市教育局 浮田氏

嶋田先生にアドバイスをいただきたい。今、初中等の先生方と作っている教材は主にコミュニケーション（話すこと）の教材で、これから漢字の教材を作りたいと考えている。そのとき、今のコミュニケーションの教材と同じ Can-do を使えばいいのか、それとも、別に漢字用の Can-do を作る必要があるのか。

A1: 今あるものから漢字用教材を作るのは無理がある。ただし全く別だと無駄が出るので、その中から覚えてほしいことを取り出して、そこで漢字用の Can-do を作ったほうがいい。両者に関連性を持たせることで、復習にもなる。

Q2: さくら学校 トウグスジャルガル先生

漢字の音読みと訓読みをどうやって教えるか。

A2: 教科書には両方の読みが出ている。ただ、教師はその時に何が求められているかを考える。学生は自律的に学び覚えていくし、人によって学びは異なる

